

ようとするならば、どうしても大毘婆沙論・俱舍論まで下らなくてはならないのと同じで、南傳佛教の教義を組織的に述べようと思うならば、どうしても佛音まで下らなくてはならぬ。そういう意味からいうならば、南傳の七論は有部の六足論に相當する位置にある、といつてよい。

南傳阿毘達磨の教義は、佛音によつて始めて組織的に纏めて述べられることとなつた。それはすなわち清淨道論である、だから南傳の阿毘達磨の教義を解明するためにはまず清淨道論を第一にとり上げなくてはならないが、これを補うものが、同じく佛音の作とせられてゐるところの法集論註と分別論註とである。これら三書は、分量からいへても大體同じくらいのものであり、取り扱つてゐる範囲も幾らか重複してゐるところもあつて、どうしても、これら三書をもつて南傳阿毘達磨のテキストとしなくてはならない。前述の攝阿毘達磨義論の如きは、この清淨道論を要約してその綱要を示したものと見られる。佐々木現順教授によつて全卷和譯せられた法集論註が、今回刊行せられた「佛教心理學」の大部 分をうめているのである。

この法集論註は、曾つて赤沼智善先生から講讀して頂いたことがあつた。そのとき私も本書の著者とともにその講筵につらなつたが、先生はペーリ・テキスト・ソサエティー本を底本とし、シャム國皇室版を參照しつゝ讀まれたことであつた。ところがこのテキストはまことに不完全なもので、シャム版と合せると、ときには一頁近くも脱落があつたりして、到底そのままでは読み切れるものではなかつた。けれどもその後著書はインドにおいてババット博士から、更に完全なテキストを與えられ

た。このことが著書をしてこの和譯を完成させる機縁となつたようである。この書はババット博士によつてデーヴナガリ字體をもつてインドから出版せられている。

それで佐々木教授はまずババット本によつてこれを和譯し（五三七頁）、これに「研究序説」（一一五頁）を加えて一書を構成した。「研究序説」はこの法集論註の研究の手引の役目をなすもので、とくに南傳の阿毘達磨にはじめて接する者のために懇切な解説を附し、この論註が主として扱つてゐる問題——佛教心理學——についてその概要を示し、著書佛音に對する疑義と、佛音の傳記などについて述べている。

本書の出版によつて、南傳の阿毘達磨の研究は一段と進展したことになる。この上は、分別論註の和譯刊行と、更に清淨道論——南傳大藏經の中で水野弘元博士によつてすでに和譯せられている——を加えた三書の綜合的研究によつて、南傳阿毘達磨の教義の全貌が明かにされることが期待せられる。（A5七百四頁・昭和三十五年三月・日本學術振興會發行・千圓）

## PROCEEDINGS IXTH INTER-

NATIONAL CONGRESS FOR  
HISTORY OF RELIGIONS TOKYO 1958

大屋 憲一

一九五八年八月二十八日、東京で開會された第九回國際宗教學宗敎史會議は、東京に於ける本會議、シンボジウムの後、日光、鎌倉、伊勢、奈良、京都等の日本に於ける宗教文化センタ

一への研究旅行を経て、九月八日京都で閉會した。

ここに紹介する書は、この折の會議の記録であり、第九回國際宗教宗敎史會議の日本側準備委員會によつて編纂され、丸善書店から出版されたものである。周知の通り、この會議は一九〇〇年以來催され、前八回の會議がすべてヨーロッパに於てなされたのに對し、第九回の會議が初めてヨーロッパ以外の我國に於て催されたのである。このことは「過去及び現在に於ける東洋の宗教」が主題とされた今回の會議を一層意味あるものとしたのであり、從つて歐米諸國からの多くの専門家達が、東洋の諸宗敎、特に日本の宗敎の實態について新しい理解や經驗を持つことが出來、又、引いては日本に於ける宗敎研究者の研究を増進する上で大いなる刺戟を與えたものとして意義深いものがある。今日、科學や經濟、政治等が東西の交流を目指してゐる折、ひとり實際の生きた世界の諸宗敎の場合には舊態依然としてその交流が殆んど意圖されていない現状にかんがみ、この會議に於て、宗敎に於ける寛容と不寛容の問題、宗敎の特性と統一(unity)の問題が、改めて論ぜられることとなつたのも當然と云えよう。この會議の講演に於ても、所謂宗教史學派の流れを汲むF・ハイラーやG・メンシングのような學者達は、諸宗敎の統一と云うことを強調したのであるが、然しそれは勿論、合理的な眞理概念を前提とする諸宗敎の抽象的普遍としての統一でもなければ、諸宗敎の多を排除した一でもないことは云うまでもない。諸宗敎が多にして一であるとは、メンシングによれば、凡ゆる諸宗敎の深層のうちに一つの窮極的な統一が存すると云うこと、多様なる諸宗敎を貫いて宗教的原體験が存

すると云うことであつて、宗教とは具體的にはスーサン的な實在即ち聖なるものとの出會いであり、又、その實在によつて規定される人間の應答であつてそれは一つの實存的な眞理なのである。そして彼がルドルフ・オットーを高く評價する所以も亦、このような點にあると云わなければならない。そして、このような立場につとによつて、異宗教を聖なるものとの出會いの純正にして且つ正當な可能性として承認すると云うこと、それが彼の主張する所謂「內容的寛容」なのである。メンシングは、ハイラーと同様に、宗教を大別して預言者的宗教と神祕主義的宗教とに區分する。即ち預言者的宗教(ユダヤ教、イスラム教、キリスト教)は他の諸宗教と關係する場合に不寛容に傾くが、神祕主義的宗教(印度教、佛教等印度や極東の諸宗教)は寛容であるとされる。そのことは、ハイラーも指摘しているように、預言者的宗教が排他的な絕對性を主張するからであり、そしてそのことはキリスト教内部での今日のプロテスタンティズムを支配している辨證法神學についても云い得ることであるが、それに對して神祕主義的宗教は、他の諸宗教を認めると云う內容的寛容を有するからであるとする。そしてこのような預言者的宗教の持つ排他的な絕對性的要求は、血なまぐさき宗教裁判や度々の宗教戰争をも惹起したと云うのである。このようにしてメンシングは、宗教の持つ絕對性的要求と諸宗教の多數的並存が如何にして調和され得るかと云う問題に立て、神的な實在がその極めて異つた様々の側面から、又、様々の深さと實存的規定を持つた仕方に於て、或る宗教のいろいろな表現手段を通して出會はれると云ふことを確信し、この内

容的寛容の態度によつて各宗教はその多様性を認め、夫々の教義の相異を認めつつ互いに理解し合い、教義を超えてより根本的な人間性を展開しようとするのである。然し乍ら、そのことは、宗教がその創始者の根本體験や人格を通して夫々の歴史的制約によつて規定されている以上、その獨自の固有性、乃至は傳統をも看過するが如き共通の原理であつてはならない。このような配慮からしてこの説に對する異論が生じ得るのであるが、この書はそのような意味からも各専門家の論説を理解し世界の宗教研究の動向を知る上に於て一讀を勧めたいものである。なお、この書は左の目次に一部紹介する如き夫々の部門からの深き洞察ある充實せる研究報告やシンポジウム、諸講演の記録が掲載されているので重ねて一讀をお勧めしたい。

## 目 次

委員長 石 津 照 壇

一、序 文  
一、特別講演

諸宗教の統一(Unity)への道としての宗教史

Fr・ハイラード

第一部門 (原始宗教)  
一、スカンジナヴィアのラップランド人の間に  
みられる熊祭り一、預言主義とメシア的信仰  
— 人種學並びに世界史の問題として —一、オセアニアに於ける死後の生活の觀念と埋葬の  
習慣との歴史的關係

棚瀬 裏爾

其他二篇

第三部門 (原始宗教以外の現存諸宗教)  
一、インドネシアにみられるイスラム教の傳播についての若干の考察

A・アリイ

## 第二部門 (古代宗教)

一、古代の諸宗教にみられる母なる女神 C・ブレッカ  
一、大陸文化渡來以前に於ける日本の宗教の變化

M・エーデル

一、道教と禪との關係に於ける若干の問題 福井康順  
一、古代マツウラに於けるクリシュナの神話劇

N・ヘイン

一、佛教の時輪體系に於けるマニ教とイスラム教

H・ホフマン

一、古代中國にみられる祖先崇拜と自然崇拜 池田末利  
一、佛教文獻に現れたる古代イランの宗教 春日井眞也  
一、佛教のサンスクリット文獻に見出される植物

木村秀雄

一、古代エジプトの宗教にみられる終末論 G・ランズコウスキイ

諸戸素純

一、中國に於ける祖先崇拜 中村元

塚本善隆

一、人間ゴータマの神格化  
一、ユダヤ——キリスト教徒の神觀念のギリシヤ、

P・ネメエセジイ

東洋的用語化への問題  
一、中國、日本に於ける所謂優填王所造栴檀釋迦牟尼像

其他八篇

C・M・エドマン  
W・コッパー

- 一、キリスト教思想の基礎的構造 有賀鐵太郎  
 一、制度上からみた印度教に關する最近の觀察 K・レイヴィット  
 一、非キリスト教團に於けるクリスチヤン・コミニニイケーションの問題  
 一、道教の日本への傳播、特に三戸と關聯して 菅 圓吉  
 一、大乘起信論への新しさ光 瓢 德忠  
 一、中道について W・リーベンタール  
 一、宗教的集團の創始者と組織者 宮本正尊  
 —日本に於ける宗教的權威の問題— 小口偉一

- 一、ビルマの佛教史についての第一章 オン・ピー R・ペッタツォーニ  
 一、所謂日本の一神教について 玉城康四郎  
 一、現代印度に於ける絶對性の追求 山田龍城  
 一、危機の論理 —印度・支那・日本に於ける末法説—  
 一、大乘に於ける根源惡の構造 結城令聞

第四部門 (一般・宗教現象學、心理學、)  
 (宗教社・會學、宗教哲學)  
 其他三十一篇

J・キャムブベル M・エリアーデ  
 M・フィッシュ 石津照璽

- 五回の總會に分れ、R・ダンデエカより「東洋文化の諸特質」  
 「東洋への西洋文化の影響」、H・ヤンセンより「西洋文化の  
 諸特質」、Fr・ハイラーより「ヨーロッパの知的、精神的生活  
 への東洋諸宗教の影響」、中村元氏より「西洋への東洋文化の  
 影響」等、其他が提議されており、六六七頁より七七七頁に及ぶ  
 一、西歐と日本の宗教の歴史的發達にみられる並行現象  
 公開講演 R・ペッタツォーニ  
 一、宗教に於ける寛容と眞理 G・メンシング  
 研究報告 參加者名簿
- (A5・九一四頁・昭和三十五年八月一日)  
 発行・丸善書店・三千五百圓